



TITLE:

アマチュアーの部分日食観測記 (續 日食報告號)

AUTHOR(S):

藤原, 吉衛

CITATION:

藤原, 吉衛. アマチュアーの部分日食観測記 (續日食報告號). 天界 1936, 16(186): 476-478

ISSUE DATE:

1936-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167339>

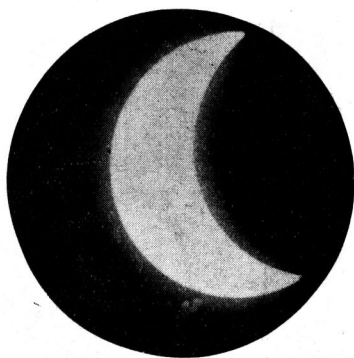
RIGHT:

アマチュア I の 部分日食観測記

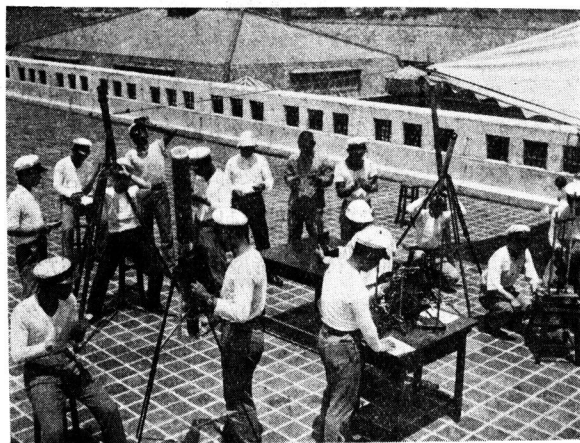
岡山——藤原吉衛

1936年6月19日の日食は當岡山地方では珍らしくも0.69の部分食が雲一つなき高空に見ることが出来、一般アマチュア I を限りなく喜ばせて呉れた。これより先小生は種々打合せの爲5月中旬頃、倉敷天文臺に小山理學士を訪ねたが、既に北海道への出發後にて、獨り準備をなして居た。

6月4日、岡山縣理科教育同好會春季總會に於て、“1936年の日食”と題して講演をなし、更に岡山縣師範學校理科會總會に於て、“アマチュア I 觀測法”と題して講演をなし、續いて6月14日には同校地歴會主催の日食講演會には“皆既線を佛曆に求めて”と題して演題に立ち、續いて同校藤原教諭の“日食の原理”林原教諭の“アマチュア I 觀測法”瀧川教



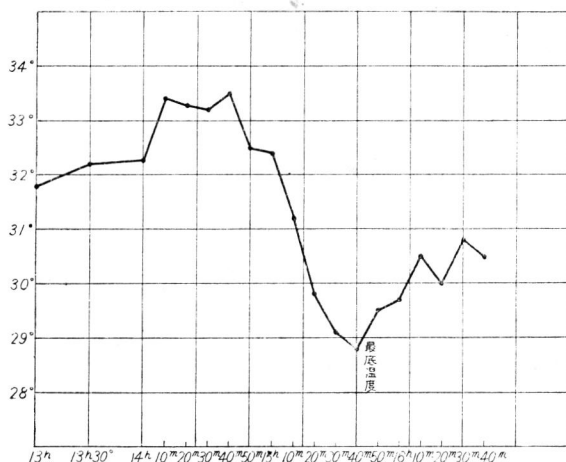
諭の“スペクトルによる太陽の研究”の演題で結び、愈々觀測陣が設けられ



第 1 觀 測 隊

ることとなつた。此の間、倉敷天文臺主事水野千里氏に逢ふ機會が與へられて、同氏が北海道へ旅立たれる前々日に種々御指導にあづかつた。残るものは倉敷支部員のみにて、心細さを感じながら

19日を待つこととなつた。北海道の様子を荒木健児氏より聞き、更に同氏の通信が毎朝の中國民報に約1ヶ月も報ぜられて、アマチュア1の騒は一通りでない。其の内に吾々の観測陣は第1班、第2班、第3班に別れることとなり、次の様な機械によつて毎日の晴天にめぐまれつつ試験(テスト)が行はれた。



第1班 師範學校屋上

4種屈折望遠鏡(島津製作)による5分間毎の日食寫眞撮影
7種屈折望遠鏡による初虧、復圓等の時刻の測定
5種屈折望遠鏡による刻々の太陽表面積の測定
手製針孔寫眞機による5分間毎の撮影照度計、日射計、反射計による観測
寒暖計による温度の變化測定

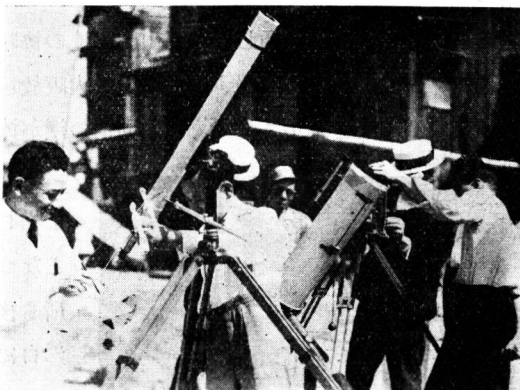
ラヂオによる全國放送局よりの中繼聴取

第2班 旭川中島嶺

高木氏所有20種反射望遠鏡及び5種屈折望遠鏡による初虧及び復圓時刻の観測及び寫眞撮影(クロノメータ使用)

第3班 師範學校校庭

樹間をのれる太陽像の寫眞撮影



第2 観測隊

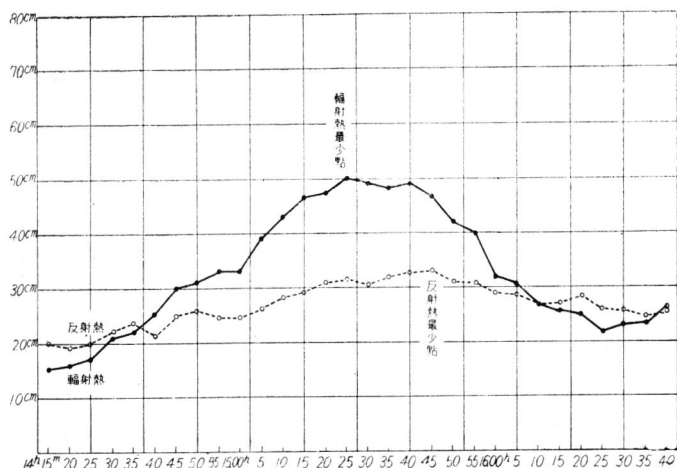
愈々19日は明けた。弱い南西風のある快晴で、天の利は正に100%である。

11時頃からは大朝、中民、山陽等の新聞社の寫眞班が自動車で詰めかけて、吾々の観測陣を撮影して廻る。生徒がガラス板に油煙につけに誦掛ける。女學生が赤、紫、緑とセルロイド製の下敷で、午後の太陽をのぞいては大聲を

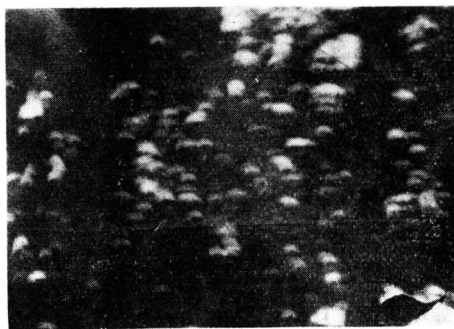
揚げる。隣の小学校では教師が可愛い生徒にうすもれて、見るも気の毒である。第2班の対岸には岡山測候所のお歴々がテントの内からしきりに小さい望遠鏡をいぢつてゐる。14時が打つた。10分を過ぎた。タイムキ1パ1の聲が恐い。息詰る瞬間遂に黄色い太陽は右下から虧け始めた。正に14時14分59秒2である。見る見る太陽は黒くなつて行く。15時15分食甚前20分頃より

あたりは
暮色に塗
られて、
知らぬ内
にびつし
より濡れ
た肩や背
の汗が冷
たく感ぜ
られる。

つい南の



岡山放送局からはマイクを通じて、岡山は全くの快晴で風も弱く市民は各々満足な観測をつづけて居ると報ずる。續いて大阪放送局からは薄曇りだと報ぜられ、東京は雨だと聞かされて、一同同情の涙が流れる。



3時12分30秒 シヤタ1 1/25

其の内太陽はぐんぐん明さを増して、16時34分29秒復圓となつた。見れば岡山縣測候所も後かたづけに取掛り、今迄口にしてゐたアイスキャンデ1の心棒を惜くも地に投げてゐる。補助の望遠鏡で手に入る如く見えるのがおかしい。

花山天文臺の方々に御参考までに寫眞その他を御送り致します。